續元文類

卷二十四

江苏工业学院图书馆
藏书章

鏡花全集　巻十四　第十四回配本（全二十九巻）

定價二千四百圓

昭和十七年三月十日　第一刷發行
昭和四十九年十二月二日　第二刷發行

著者　泉鏡太郎

發行者　岩波雄二郎

發行所　東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社　岩波書店

印刷　三陽社　製本　松岳社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

© 泉　名月　1974

目次

祇園物語（明治四十四年七月）……一
杜若（明治四十四年八月）……一〇九
月夜（明治四十四年八月）……二一七
貴婦人（明治四十四年十月）……二三五
爪びき（明治四十四年十二月）……二四五
夜釣（明治四十四年十二月）……三五一
南地心中（明治四十五年一月）……三五九
片しぐれ（明治四十五年一月）……四四九

三人の盲の話（明治四十五年四月）……四五九
絲遊（明治四十五年六月）……四八一
歌仙彫（明治四十五年七月）……五一三
紅提灯（明治四十五年七月）……五五七
淺茅生（大正元年十月）……五八一
印度更紗（大正元年十一月）……六二三
霰ふる（大正元年十一月）……六四五
五大力（大正二年一月）……六六九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

祇園物語

はしがき

御存じの彌次郎兵衛、神風の伊勢に詣でて、古市の妓樓千束屋に、上方の檀那と洒落れ、座着の猪口の遣取りには、器用な京談を遣ひしが、中立賣千本通り酒も階子でヒョイと上る邊栗屋の與太九郎と、一座のおやまの買論するや、忽ち管を卷舌にて、おへんが變じて違えねえの眞中のおぢいと成る。此の篇の京言葉、覺束なくも路一條は辿ると雖も、綾が八衢に及ぶ時は、四條小橋でトボンとして、祇園は何處だと云ふやうな、おのぼり式が澤山あり。これしかしながらお辨女郎のためにはあらず、なか〳〵酒に醉へるにあらず、作者まことに眞面目にこそ。

一

それ如月の夕越なれば、花輪櫻も雲に墨繪、まだ紅梅の莟も點れず。茶店の床几の緋の毛氈に、瀬戸ものの火鉢が寂しく、ぽつ〳〵燒穴が可哀に目に付く。

京の名所の寺々の鐘の、どれも響かぬ、フトした靜止間で。ひつそり往來の途絕えた時、東大谷の松林を、山門に向つて——綺麗に掃清めた埃の無いのが、むざとは人の通はぬ、奧山家の一筋道で、計知られぬ何かの境へ導き入るゝかと、もの懷かしく、心細く且つ陰氣に見えて無明の橋の思がする——敷石の上を、唯一人、うしろ向きに行く法師があつた。

旅僧であらう……線香の煙が、ソヨとの風もないために、ひたと袖袂の、襞積に絡まつたやうな鼠の法衣に、袈裟は懸けず、長途の旅を思はする、露に塵に、朽葉色にも成んぬ、脚絆、甲掛。素足に草鞋で、檜笠を、被らず片手に提げた。頭巾もなく、月も射さば痛からう、ゴソと二分ばかりの、髮の黑さは未だ少い。白木綿の風呂敷包み、眞中を紺の紐で結へたのを左手にした。……其の笠も、西行背負も、墓所に向ふ謹みに、早や解き脫したものらしい。

途中の塵埃も拂つたか、旅の法衣に砂も留めず、すき〳〵と清げにも見ゆるのが、露にしつとりと濡れたか、と殊勝にもあはれである。

茶店の端に婆も居らず、遠近に豆腐屋の聲も無い。

花輪櫻が唯一樹、今其處を通り過ぎた旅僧の袖を、衝と及腰に引止むるが如く枝垂れて居た。

渠の姿は少しづゝ、町より、家より、四條より、此の圓山の一處より、其より、獨り一本の櫻の枝に遠ざかる。

後に霞なく、前に霧なく、眞中に靄もなく、透通つたやうな其の松林の敷石を渡るのが、朧に成るより一層幽に、浮世に離れた趣である。

茶店の前の人なき處へ、忽ち、ばら〳〵と、花籠を開いたやうな、金銀の簪、錦の帶、八尺扱帶、一分の珠玉、振袖、蹴出し、褄はづれ、友染、鹿の子、緋縮緬。菖蒲、紫、紅、白粉。紋の蝶々も飜然と輕く、歩行く姿は舞の振で、扇を重ねた六七枚、祇園の舞妓、藝妓ども。

御守殿の手兒舞見るやう、極彩色にぞめいて練來る。

眞中に、煤拂の武者の如く、外套の袖を擴げて、頭輝くハイカラの御大將。四人連れた舞妓の一人に、醉つた額の鬱陶しさ、黑の中山高を脱いで持たせ、一人に銀飾りの杖を、お太刀の如く極めさせて、くな〳〵となり、ふら〳〵しながら、

「猩々！　猩々！」

と大な聲して、

「足許はふら〳〵と、入江に枯立つ……足許はふら〳〵と、入江に枯立つ、……猿澤の池に流れ灌頂は何うやい、あはゝゝ。」

と笑ふ。が、笑ふのが睨む如く、下唇がべろりと突出て、見据ゑる眼が眠むつて細い。が、京の人には珍らしく、眦がぐいと釣れた男。

頬骨の角張つた、額の廣い、髪の黑い、唇の赤い、鼻は餘り隆くないが、眉の濃い、……脊は小造りだけれども、肩幅の廣い、小肥りに肥つた、三十ばかりの立派な野蕩。

醉つた唇の色の濃いだけ、頬骨から小鼻へ掛けて、薄りと蒼味を帶びて、血走つたやうに瞼が颯と、額を仰向けに吐く呼吸が迫つて、ものを云ふ、眉の、じり〳〵と顰むで暗いのは、酒亂と見えた。

二

其の蒼白い顏に、火のやうな熱い笑を顯はして、

「これ、何うぢやい、猿澤の池の流れ灌頂は？」

「可厭らし、」と、附着いて居た藝妓が一寸退る。
「何ぢや、野晒しの癖にして、可厭らしもないもんや、肩貸せ、これ、退くないやい。」
と、ぶん廻しの様に威勢よく、霜降めりやすの襯衣を長く、腕を高く揮廻す、と間近に居た可愛い舞妓が、兩方の鬢をはつと壓へて横を向く。簪のビラ〳〵が夕風にぴらりと輝く。
「わはゝゝは。」
と笑つて、苦い顔して、唇を嚙みながら、
「……足許はよろ〳〵と、入江に枯立つ、足許はよろ〳〵と……」
「分つとる。……」
「よろ〳〵とばかり言はずと、何ぞ違うたのンお唄ひやすな。」と、中でも年紀上らしいのが振向いて聲を懸けた。
「ふん〳〵、何やかて謠うて聞かせる。……な、シテと小がきにある奴や。可えか。……これは洛中一杯に幅をいたす、六條の縮緬問屋、大竹和八とは我が事なり。今日は志す事も何もなく、清水に詣で、高臺寺に遊び候。之より祇園に立歸らうずる處にて候。」
「そないな事、分つとる、可えやないか。」
「見とうもない大な聲おしやすな。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

「地聲やが、大な聲は。……京ではこれ、御慮外ながら釣鐘と云ふ男や。――可えか、戀も無情も、私に撞木の當りやう一ツやて！　ゴーン、ウヽウヽン、モン〳〵〳〵、ワン、グワン〳〵グワン。」

「おゝ。」

と云つて、三人ばかり一齊に耳を壓へた。

「何ないしやはる。」

「助からんえ。」

「死にさらせ。」

と怒鳴つて、又目を眠つて吻と呼吸。

「序に十八番の長唄や。……旅の衣はすゞかけの、旅の法衣はすゞかけの、露けき袖や絞るらん。これ、一緒に唄へ。えゝ、口三味線やらんかい。」

唄は違つても足許は如件、よろ〳〵で、圓山の同一所を、四邊八面にひよろついたが、フト思出した樣に、どた〳〵と駈出して、すらりと優しい影のやうに立つた、花輪櫻の根に近く、大手を一つ、ぬッと開いた。

腰が、据らず、のめつて俯伏にならうとする。

「危いえ。」
「わややな。」
で、はら〳〵と寄つて藝妓、舞妓は、背後から取卷いた。……中には美しい眉を顰めたものもある。
ぐんなり背を搖り、反つて視め、
「これに、別嬪の候。櫻、これ、私が方へ靡けやい、肯きさらさぬと、汝。」
と目を据ゑ、唐突に對手も構はず、……
「あれ。」
と言ふ藝妓の、腕をぐい、と取る、と身を揉む姿の膝もわなゝく、挫折るやうに引張りつゝ、
「な、言ふ事を肯きさらさぬと、薪にして大文字の下積や。寺の門から墓所拔けに打上げるんや、どないする。」
と切なさうに苦笑ひをしながら、枝ぶりを睨廻した目が、暮れかゝる東山の墨染を衝と仰ぐと、遽い國を、海を隔てて望むが如く、敷石の白濱や、漣の松の蔭。……靜かに水脚を引いて行く、流木のやうな、旅僧の、その寂しい後姿を認めたのである。
熟と視て、大な口をゆがめたが、嘲つてニヤリとした。

「年寄ではないやろ、あの坊主の背後つき、何うや？　見て見い。」
と酒の香を横顔に吐懸けたが、忘れたやうに手を放す。
今引抱かれた、其の若いのが、腹を立つた様子もなかつた。京の女は、聲も優しい。
「あ、ほんに少うおすなあ。」

三

和八は目を据ゑて、頷いて、
「年紀の少いに阿房な奴や。坊主に成つて、後生願うて、地獄の門へ去にさらす。……何うや、祇園町でもすぐり抜いた天人に取卷かれて、凡夫が爰に、可え機嫌でましますぢや。
しよぼ〳〵草鞋穿きで行く、あの狀見い。しゆみさが堪らんわい。……何も功徳や、餓鬼に酒一ッ振舞うて、綺麗な佛拜まさう。一番、白粉まぶしの紅でうでて、鮹の揚物と仕る。わはゝ、面白い。」
又唇を嚙んで、
「舞妓、これ、ちやつと行て、何なと云うて、あの坊主、連て來い。」
「あた怪體な、およしやすえ。」と、銀杏返の年上なのが、舞妓に目配せして言つた。

「私、可厭や。」
と其の舞妓が云ふ。
「吐かすな〳〵、行けい云うたら行かぬかい。時が來れば釣鐘が鳴りますわ。はて、朝の別がつらい云うて、鐘撞かせずには濟まんやないか。和八が御意は、我手で撞木を當てる奴や、鳴出いたら聞かさにや置かぬが。
さあ、行かぬかい。行かずば大將御出馬ぢや。」
「待ちいな、貴郎が行かはつたら喧嘩やがな。……どないしまほ……まあ、千鳥はん、汀はん、あない言やはる、あんた二人で行て見なはれ。」
と氣の無ささうに、銀杏返が指揮をする。
「あい。」「あい。」
からころ木履のじやれた音。綱を切つて車を推した、花籠二ツ、くる〳〵とめぐる風情に、揃つて敷石を駈出した。
彼方でひらりと、法衣の袖に、二人の姿の縺れたは、おはぐろ蜻蛉に衝と投掛けた、かゞり絲の兩端の紅の珠かと見ゆる。
「何うや、坊主は來るやろな。」

「來やはりはしまへんえ。」
「なあ。」
と見交はし、言交はす。
「馬鹿吐かせ、極樂の接待や。京の藝妓拜まいて、酒振舞ふと云ふ菩薩に、搔踞はぬ奴があるか。」
「あれ、見なはれ。汀はんが坊さんの袖につかまりやしたえ。」
「あの妓が行たで、連れまして來やはるか分らん。何云うたかて、誰も叶はん妓やはけな。」
「面白い、坊主が一つくるりと廻つた。はあ、蛸壺の浮いた處や、——汀に千鳥も見えて候。」
ぐたりと成つて、身體を振つたが、瞳を返して、向うの角の茶店を見た。
が、切なさうに眉根を顰めて、
「えゝ、……お岸、何しとる。此處へ來い。それ、今坊主を呼んで來るんや。きこう、大好物なもんやろが。」
と、何故か、唇を曲げつゝ呼んだ。
其處に、漆のやうな房りした黑髮を、引結めの櫛卷、黃楊の櫛にわがね餘つて、はらりとする。襟脚の白い、耳許の清らかな、瓜核顏の、鼻筋のすつと通つた、一かは目瞼は寂しいが、黑目勝

のぱつちりと、水晶に露の滴る、うるみのある、品の可い、優しいのが、美しい眉を展いて、や其の顔を仰向けに、撫肩の細りした、片手、なよ〳〵と疲れた狀に下へ支いた、白魚の指の映る、毛氈の色が榮えて、ちらりと篝の燃立つばかり。

質素な服裝が水際立つ。……羽織は着ないで、紺地へ茶と藍と、忘れたやうに紅の交つた亂立のお召縮緬。黄金はなしに、錦と見ゆる、印度更紗の帶を、少し胸前を下げ、衣紋は寛いが、胸の薄い、お太鼓のぱちん留。淺葱の麻の葉鹿の子、背負上げの結んだ端、媚かしいは其ばかりで、下着の色も見えないまで、褄を深く、床凡に淺く、すらりと靡いて腰を掛けた。

年紀は丁どか……一ツ内外。

四

端近に休らう、敷居を隔てて、角の其の茶店の軒下に、でこ〳〵と圓髷に結つた、横肥りのしたのが、仰々しくも黑繻子の丸帶。襦袢が水紅色と云ふ難のある他、申分の無い、誂へたやうな乳母どのが、取つて二ツぐらゐ、人形かと思ふ、色の白い、いたいけな嬰兒を胸はだけに大事と抱いて、密と差出す。……

莞爾々々とする其の嬰兒に、……片手で銀紙の風車を見せて、風が無いから、其の打仰いだ細

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo